

## 第13回「泉大津市オリアム随筆賞」

### 【泉大津市長賞】

優れもの

倉長 秀至・大阪府泉大津市

昭和三十五年三月、高校を卒業し就職のため大阪にやって来た。十八年間生まれ育った故郷を離れ、憧れの大阪で社会人として一步を踏み出した。

あの日から早や六十有余年が過ぎた。昭和四十八年三月に念願のマイホームを購入、七月に家族四人で泉大津市に移住した。

泉大津市は全国一位の毛布生産量を誇り、毛布の他にもセーター等、ニット製品も多く作られていた。町は好景気に支えられ、活気に満ち溢れていた。町のいたる所で、織機のガチャン、ガチャンと言う音を耳にした。移住した当時は、聞きなれない織機の音が雑音にしか聞こえなかった。しかし、数カ月経つとこの音が町を元気にし、活力を与える『応援歌』のように聞こえるようになった。

毛布は我が子の成長をも支えてくれた。夏は綿毛布、冬は純毛の毛布だ。寒い夜、幼い我が子が暖かい毛布に包まれ、心地よい眠りに入る。その寝顔を見て、安心して床に就いたものだ。毛布の不思議な力と織子さん達の温かい心が伝わってくると感じた。お陰で二人の子どもは元気に成長した。毛布は身体と心を温かく包む不思議な力を持つ『優れもの』である。そして、毛布は炬燵カバーやひざ掛け、マット等、多種多様なリサイクルにも力を発揮し、新しい命を生む素晴らしさがある。

私の故郷は山陰地方の中ほど、海と山に囲まれた自然豊かな農村地帯である。秋が深まり、木々の葉が紅く色づいて散るころ、国立公園『大山』に初冠雪を見る。この初冠雪が本格的な冬の到来を告げているのだ。寒さが厳しい故郷には、今も多くの親類や知人が生活している。

私は親類や知人にお祝い事があると、必ず地元特産の『毛布』を贈った。皆から感謝の言葉を聞くと、嬉しく誇りに思った。

毛布業界は、時代の変遷と共に進化している。昔の毛布は純毛が主流で、色もデザインもシンプルだった。今は素材も多く、色やデザインも豊富で、新商品の開発など、毛布業界は日々進化している。

一方、平成三年にバブルが崩壊し、日本経済は大きな打撃を受けた。その影響は、毛布業界にも及んだ。産業界は業種を問わず安い労働力を求め、生産拠点を東南アジアなどにシフトする動きが加速した。更に前後して、高齢化や人手不足、後継者問題などが深刻化し、廃業する業者も多く織物会社は激減した。

しかし、時を経た現在も泉大津市は毛布生産量『日本一』の座を維持している。このことは、生産者の毛布に対する強い思いと毛布づくりへの情熱の表れであろう。

泉大津の町から永遠に織機の音を消してはならないと思う。

この町では地場産業の毛布が、災害時の救援物資として大きな役割を果たしている。

平成七年一月十七日未明に発生した『阪神淡路大震災』は、私にとって特別な思いがある。それは発生から三日目に連絡が取れない同僚が心配で、友人と二人で安否確認に現地を訪れた時の事である。午前十時頃、阪神西宮駅を出発した。同僚の住む魚崎町までは、徒歩で往復約七時間の道のりであった。幹線道路は救援物資を運ぶ車で大渋滞。道路沿いの歩道は大きなリュックを背負い、両手に持ちきれないほどの荷物を持った人達が多く行き交っていた。私もリュックに肌着と非常食を詰め、手には毛布と飲料水を持ち同僚の住む住所を指した。途中、倒壊した多くの建物の下には救いを求める人達がいたであろうか。三時間半近く歩き、ようやく現地に着いた。そして、背丈ほどに押し潰された屋根の上で、物を探す彼の姿を見た時、私は友人と三人で抱き合い感動のあまり涙を流した事が昨日の様に思われる。家族も無事で心から安堵した。早速、持参した毛布の包みを解き『毛布』を肩に掛けると、彼は笑顔に涙を浮かべ、「ありがとう！」と喜んでくれた。この時の表情はとても印象的で二十九年経った今も鮮明に蘇る。この感動と地震で破壊された町の風景は、脳裏に焼き付き、生涯忘れることはないだろう。被災地への支援物資では『毛布』が重要な役割を果たしている。特に寒い時期の被災地は寒さと孤独との闘いである。

毛布は冷えた身体と心を温かく包み、明日への生きる希望と勇気を与えてくれる。この様に、地場産業の毛布が、社会貢献で大きな役割を果たしているのは私を含め泉大津市民にとって、大きな誇りとなっている。